で、之れは小供らの罪ばかりでなく、全く兩親がわるいのである、自分の家にないから、自然かうなるのだ、かういう心が增長しては恐るべきものであるということを、痛く心配して、あらゆる果樹をうゑて、決して盜むというやうな心を小供らに起させぬやうにと、人にも聞かせ、小供らにも平生言ひ含めて居るそーだが、中々言うて見れば雜作もないことであるが、かゝる人は、ありがたい事と思はれる、かゝる敎への庭に育つた子供らの立派なこと、言はずも明かなことでありましょー併しをしい事には、昔人だけで、體育にはあまり、感服しない事もある、又この兒童の薄弱なのも、この祖父の缺點でありはせぬかと、疑はれるのである。

（未完）

子供心

長野　飯島八千溪

▲或所に、六七歲になる、女の子が有りました。或日、お隣へ遊びに行きましたに、其時丁度、お隣の叔母さんが、着物の蚤を捕つて、火鉢にくべて居ました。そーすると、其女の子が「アレこゝの叔母さんわ、蚤を燒いてたべるの、私のとこのおつかさんわ、生でたべますよ」と話しました。

▲又或所に、貧乏で、三度の食事も、甚だ、粗末で、寢るに布團もなく、僅に、藁屑の中に寢ると云ふ、憐な暮しをして居る、家が有りました、或時、父が其子に、「お前わ、決して、人に藁屑の中に寢るなどゝ云つてわ、なりませんぞ」と、云ひ聞かせました。すると、或日の事、父が藁細工をして居る所へ、人が來て、話しをして居る、其時

父の頭に、藁屑が、付いて居るのを、其子が見付け、あわてゝ、「アレ父様の頭に、お布團が取付て居るよ」と云ひました。

信州松代の手毬歌

石坂よし

▲一や二ーみいやよー。よめよめ吉田の千本柳に雀が三疋とーまつて、一羽の雀は嫁入なさる、二羽の雀はむこ入なさる、三羽の雀は、酒買に行くとて、鷹におはれて、あれやポン〳〵これやポン〳〵。ぢゝば、一寸來て一寸かくせ、まづ〳〵一貫貸し申した。

▲ざん〳〵ざら〳〵くだ〳〵梅の花、こゝでお一つお手ばたき。

▲お輕は二階でのべ鏡椽の下では小野九太夫、主人の退夜にたこざかな。おさかなとる猫どろぼう猫、やつと山猫さんしよ猫、やあとせやつとさのせ。

八月の天地

摩訶生

午後二時前後、寒暖計は常に九十三四度を昇降す、涼い哉……心の置き方によりては。氷を飲みて暑を凌ぐ國民は懦弱の國民に非ずば野蠻人の仲間なり。寧ろ鐵瓶の蒸氣のシユン〳〵たる傍、白湯一杯を傾けむものに與せん哉 心氣爽然として、